



STP の設定

この章では、Catalyst 2960 スイッチのポートベース VLAN（仮想 LAN）上で Spanning-Tree Protocol（STP; スパニングツリー プロトコル）を設定する方法について説明します。このスイッチは、IEEE 802.1D 標準に準拠した Per-VLAN Spanning-Tree plus（PVST+）とシスコ独自の拡張機能の組み合わせか、もしくは IEEE 802.1w 標準に準拠した Rapid Per-VLAN Spanning-Tree plus（Rapid PVST+）プロトコルのいずれかを使用できます。

Multiple Spanning-Tree Protocol（MSTP）および複数の VLAN を同一のスパニングツリー インスタンスにマッピングする方法については、[第 16 章「MSTP の設定」](#)を参照してください。PortFast、UplinkFast、ルート ガードなどのその他のスパニングツリーの機能については、[第 17 章「オプションのスパニングツリー機能の設定」](#)を参照してください。



(注)

この章で使用するコマンドの構文および使用方法の詳細については、このリリースに対応するコマンドリファレンスを参照してください。

この章で説明する内容は、次のとおりです。

- [スパニングツリー機能の概要 \(p.15-2\)](#)
- [スパニングツリー機能の設定 \(p.15-12\)](#)
- [スパニングツリー ステータスの表示 \(p.15-24\)](#)

スパニングツリー機能の概要

ここでは、次の概要について説明します。

- [STP の概要 \(p.15-2\)](#)
- [スパニングツリー トポロジーと BPDU \(p.15-3\)](#)
- [ブリッジ ID、スイッチ プライオリティ、および拡張システム ID \(p.15-4\)](#)
- [スパニングツリー インターフェイス ステート \(p.15-5\)](#)
- [スイッチまたはポートがルート スイッチ またはルート ポートになる仕組み \(p.15-7\)](#)
- [スパニングツリーおよび冗長接続 \(p.15-8\)](#)
- [スパニングツリーのアドレス管理 \(p.15-9\)](#)
- [接続を維持するためのエイジング タイムの短縮 \(p.15-9\)](#)
- [スパニングツリー モードおよびプロトコル \(p.15-9\)](#)
- [サポートされるスパニングツリー インスタンス \(p.15-10\)](#)
- [スパニングツリーのインターオペラビリティと下位互換性 \(p.15-10\)](#)
- [STP および IEEE 802.1Q トランク \(p.15-11\)](#)

設定手順については、「[スパニングツリー機能の設定](#)」(p.15-12) を参照してください。

オプションのスパニングツリー機能については、[第 17 章「オプションのスパニングツリー機能の設定](#)」を参照してください。

STP の概要

STP は、ネットワーク上でループを防止しながら、パスの冗長性を実現するレイヤ 2 リンク管理プロトコルです。レイヤ 2 イーサネット ネットワークを正しく動作させるには、2 つのステーション間に存在するアクティブ パスは 1 つでなければなりません。エンドステーション間に複数のアクティブパスがあると、ネットワークにループが生じます。このループがネットワークに発生すると、エンドステーションにメッセージが重複して到着する可能性があります。また、スイッチも複数のレイヤ 2 インターフェイスのエンドステーション MAC (メディアアクセス制御) アドレスを学習する可能性があります。このような条件が発生すると、不安定なネットワークになります。スパニングツリーの動作はトランスペアレントであり、エンドステーション側で、単一 LAN セグメントに接続されているのか、複数セグメントからなるスイッチド LAN に接続されているのかを検出することはできません。

STP は、スパニングツリー アルゴリズムを使用し、スパニングツリーのルートとして冗長接続ネットワーク内のスイッチを 1 つ選択します。スパニングツリー アルゴリズムは、アクティブ トポロジーでのポートの役割に基づいて各ポートに役割を割り当てることにより、スイッチド レイヤ 2 ネットワーク上で最良のループフリーパスを算出します。

- ルート — スパニングツリー トポロジーに対して選定される転送ポート
- 指定 — 各スイッチド LAN セグメントに対して選定される転送ポート
- 代替 — スパニングツリーのルートブリッジへの代替パスとなるブロックポート
- バックアップ — ループバック コンフィギュレーションのブロックポート

すべてのポートの役割が、「指定」または「バックアップ」のスイッチを、ルートスイッチといます。少なくとも 1 つのポートの役割が「指定」のスイッチを、指定スイッチといます。

冗長データパスはスパニングツリーによって、強制的にスタンバイ (ブロックされた) ステートにされます。スパニングツリーのネットワーク セグメントでエラーが発生したときに冗長パスが存在する場合は、スパニングツリー アルゴリズムがスパニングツリー トポロジーを再計算し、スタンバイパスをアクティブにします。スイッチは、定期的に Bridge Protocol Data Unit (BPDU; ブリッジ

プロトコル データ ユニット) と呼ばれるスパニングツリー フレームを送受信します。スイッチはこのフレームを転送しませんが、このフレームを使用してループフリー パスを構築します。BPDU には、送信側スイッチおよびそのポートについて、スイッチおよび MAC アドレス、スイッチ プライオリティ、ポート プライオリティ、パス コストなどの情報が含まれます。スパニングツリーはこの情報を使用して、スイッチド ネットワーク用のルート スイッチおよびルート ポートを選定し、さらに、各スイッチドセグメントのルート ポートおよび指定ポートを選定します。

スイッチの 2 つのポートがループの一部になっている場合、スパニングツリー ポート プライオリティとパス コストの設定値によって、どちらのポートをフォワーディング ステートにするか、どちらをブロッキング ステートにするかが制御されます。スパニングツリー ポート プライオリティ値は、ネットワーク トポロジーにおけるポートの位置とともに、トラフィック転送におけるポートの位置がどれだけ適切であるかを表します。パス コストの値は、メディアの速度を表します。



(注)

Small Form-Factor Pluggable (SFP) モジュールを搭載していないインターフェイスにのみ、スイッチがキープアライブ メッセージを (接続が有効か確認するため) 送信します。

スパニングツリー トポロジーと BPDU

スイッチド ネットワーク内の安定したアクティブ スパニングツリー トポロジーは、次の要素によって制御されます。

- 各スイッチのそれぞれの VLAN に対応付けられた一意のブリッジ ID (スイッチ プライオリティおよび MAC アドレス)
- ルート スイッチに対するスパニングツリー パス コスト
- 各レイヤ 2 インターフェイスに対応付けられたポート ID (ポート プライオリティおよび MAC アドレス)

ネットワーク内のスイッチに電源が投入されると、それぞれがルート スイッチとして機能します。各スイッチは、そのすべてのポートからコンフィギュレーション BPDU を送信します。BPDU によって通信が行われ、スパニングツリー トポロジーが計算されます。各コンフィギュレーション BPDU には、次の情報が含まれます。

- 送信側スイッチがルート スイッチとみなしたスイッチの固有ブリッジ ID
- ルートに対するスパニングツリー パス コスト
- 送信側スイッチのブリッジ ID
- メッセージの有効期間
- 送信側インターフェイス ID
- Hello タイマー、転送遅延タイマー、および最大エージング プロトコル タイマーの値

スイッチは、**優位**の情報 (より小さいブリッジ ID、より低いパス コストなど) を格納したコンフィギュレーション BPDU を受信すると、そのポートのためにこの情報を保存します。スイッチは、この BPDU をルート ポートで受信した場合は、更新されたメッセージ付きで、自身が指定スイッチであるすべての接続 LAN に対して BPDU を転送します。

そのポートに対して現在保存されているものより **下位**の情報を格納したコンフィギュレーション BPDU を受信した場合は、BPDU は廃棄されます。スイッチが、下位 BPDU の送信元の LAN の指定スイッチである場合は、そのポート用に保存された最新情報を格納した BPDU をその LAN に送信します。このようにして下位情報は廃棄され、優位情報がネットワークで伝播されます。

BPDU の交換によって、次の処理が行われます。

- ネットワーク内の 1 台のスイッチがルート スイッチ (スイッチド ネットワークのスパニングツリー トポロジーの論理的な中心) として選択されます。

各 VLAN で、スイッチのプライオリティが最も高い（プライオリティ値が数値的に最も小さい）スイッチがルートスイッチとして選定されます。すべてのスイッチがデフォルトのプライオリティ（32768）で設定されている場合は、VLAN 内で最小の MAC アドレスを持つスイッチがルートスイッチになります。スイッチのプライオリティ値は、ブリッジ ID の最上位ビットを占めます（表 15-1 [p.15-4] を参照）。

- 各スイッチ（ルートスイッチを除く）に対して 1 つのルートポートが選択されます。このポートは、スイッチによってパケットがルートスイッチに転送されるときに、最適なパス（最小コスト）を提供します。
- スイッチごとに、パスコストに基づいてルートスイッチまでの最短距離が計算されます。
- 各 LAN セグメントの指定スイッチが選定されます。指定スイッチでは、LAN からルートスイッチへのパケット転送の場合、パスコストが最小となります。指定スイッチが LAN に接続するポートのことを指定ポートと呼びます。

スイッチドネットワーク上のすべての地点からルートスイッチに到達する場合に必要なパスはすべて、スパニングツリーブロッキングモードになります。

ブリッジ ID、スイッチプライオリティ、および拡張システム ID

IEEE 802.1D 規格では、各スイッチに一意のブリッジ識別子（ブリッジ ID）を設定する必要があります。この ID によってルートスイッチの選択が制御されます。各 VLAN は PVST+ と Rapid PVST+ によって異なる論理ブリッジとみなされるので、同一のスイッチには、設定された VLAN ごとに異なるブリッジ ID が設定されていなければなりません。スイッチ上の各 VLAN には一意の 8 バイトブリッジ ID が設定されます。上位の 2 バイトはスイッチプライオリティに使用され、残りの 6 バイトがスイッチの MAC アドレスから取得されます。

スイッチでは IEEE 802.1t スパニングツリー拡張機能がサポートされ、従来はスイッチプライオリティに使用されていたビットの一部が VLAN ID として使用されるようになりました。その結果、スイッチに割り当てられる MAC アドレスが少なくなり、より広い範囲の VLAN ID をサポートできるようになり、しかもブリッジ ID の一意性を損なうこともありません。表 15-1 に示すように、従来はスイッチプライオリティに使用されていた 2 バイトが、4 ビットのプライオリティ値と 12 ビットの拡張システム ID 値（VLAN ID と同じ）に割り当てられています。

表 15-1 スイッチプライオリティ値および拡張システム ID

スイッチプライオリティ値				拡張システム ID (VLAN ID と同じに設定)											
ビット 16	ビット 15	ビット 14	ビット 13	ビット 12	ビット 11	ビット 10	ビット 9	ビット 8	ビット 7	ビット 6	ビット 5	ビット 4	ビット 3	ビット 2	ビット 1
32768	16384	8192	4096	2048	1024	512	256	128	64	32	16	8	4	2	1

スパニングツリーは、ブリッジ ID を VLAN ごとに一意にするために、拡張システム ID、スイッチプライオリティ、および割り当てられたスパニングツリー MAC アドレスを使用します。

拡張システム ID のサポートにより、ルートスイッチ、セカンダリルートスイッチ、および VLAN のスイッチプライオリティを手動で設定する方法に影響が生じます。たとえば、スイッチのプライオリティ値を変更すると、ルートスイッチとして選定される可能性も変更されることになります。大きい値を設定すると可能性が低下し、値が小さいと可能性が増大します。詳細については、「ルートスイッチの設定」(p.15-15)、「セカンダリルートスイッチの設定」(p.15-17)、および「VLAN のスイッチプライオリティの設定」(p.15-20) を参照してください。

スパンニングツリー インターフェイス ステート

プロトコル情報がスイッチド LAN を通過するときに、伝播遅延が生じる可能性があります。その結果、スイッチドネットワークのさまざまな場所で、さまざまな時期に、トポロジーの変更が起こる可能性があります。インターフェイスがスパンニングツリー トポロジーに含まれていない状態からフォワーディング ステートに直接移行すると、一時的にデータ ループが形成されることがあります。インターフェイスは新しいトポロジー情報がスイッチド LAN 上で伝播されるまで待機し、フレーム転送を開始する必要があります。インターフェイスはさらに、古いトポロジーで使用されていた転送フレームのフレーム存続時間を満了させることも必要です。

スパンニングツリーを使用しているスイッチの各レイヤ 2 インターフェイスは、次のいずれかのステートになります。

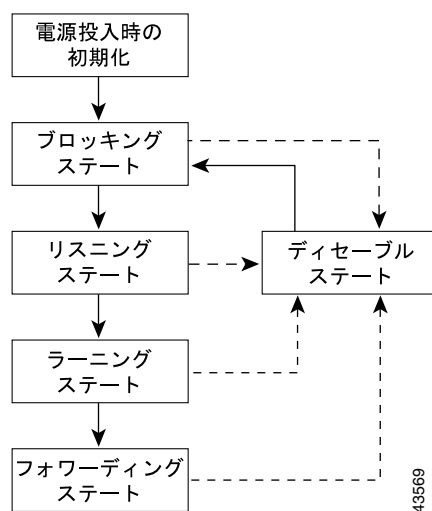
- ブロッキング — インターフェイスはフレーム転送に関与しません。
- リスニング — インターフェイスをフレーム転送に関与させることをスパンニングツリーが決定した場合、ブロッキング ステートから最初に移行するステートです。
- ラーニング — インターフェイスはフレーム転送に関与する準備をしている状態です。
- フォワーディング — インターフェイスはフレームを転送します。
- ディセーブル — インターフェイスはスパンニングツリーに含まれません。シャットダウン ポートであるか、ポート上にリンクがないか、またはポート上でスパンニングツリー インスタンスが稼働していないためです。

インターフェイスは次のように、ステートを移行します。

- 初期化からブロッキング
- ブロッキングからリスニングまたはディセーブル
- リスニングからラーニングまたはディセーブル
- ラーニングからフォワーディングまたはディセーブル
- フォワーディングからディセーブル

図 15-1 に、インターフェイスがステートをどのように移行するかを示します。

図 15-1 スパンニングツリー インターフェイス ステート



デフォルト設定では、スイッチを起動するとスパニングツリーがイネーブルになります。その後、スイッチの各インターフェイス、VLAN、またはネットワークがブロッキング状態からリスニングおよびラーニングという移行状態を通過します。スパニングツリーは、フォワーディング状態またはブロッキング状態で各インターフェイスを安定させます。

スパニングツリー アルゴリズムがレイヤ 2 インターフェイスをフォワーディング状態にする場合、次のプロセスが発生します。

1. スパニングツリーがインターフェイスをブロッキング状態に移行させるプロトコル情報を待つ間、インターフェイスはリスニング状態になります。
2. スパニングツリーは転送遅延タイマーの満了を待ち、インターフェイスをラーニング状態に移行させ、転送遅延タイマーをリセットします。
3. ラーニング状態で、スイッチがデータベース転送のためにエンドステーションの位置情報を学習している間、インターフェイスはフレーム転送を引き続きブロックします。
4. 転送遅延タイマーが満了すると、スパニングツリーはインターフェイスをフォワーディング状態に移行させ、このときラーニングとフレーム転送の両方が可能になります。

ブロッキング状態

ブロッキング状態のレイヤ 2 インターフェイスはフレームの転送に関与しません。初期化後、スイッチの各インターフェイスに BPDU が送信されます。スイッチは最初、他のスイッチと BPDU を交換するまで、ルートとして動作します。この BPDU 交換によって、ネットワーク上のどのスイッチがルート、すなわちルートスイッチであるかが確立されます。ネットワークにスイッチが 1 台しかない場合、交換は行われず、転送遅延タイマーが満了し、インターフェイスがリスニング状態になります。インターフェイスはスイッチの初期化後、必ずブロッキング状態になります。

ブロッキング状態のインターフェイスは、次の機能を実行します。

- インターフェイス上で受信したフレームを廃棄します。
- 転送用に他のインターフェイスからスイッチングされたフレームを廃棄します。
- アドレスを学習しません。
- BPDU を受信します。

リスニング状態

リスニング状態は、ブロッキング状態を経て、レイヤ 2 インターフェイスが最初に移行する状態です。インターフェイスがリスニング状態になるのは、スパニングツリーによってそのインターフェイスのフレーム転送への関与が決定された場合です。

リスニング状態のインターフェイスは、次の機能を実行します。

- インターフェイス上で受信したフレームを廃棄します。
- 転送用に他のインターフェイスからスイッチングされたフレームを廃棄します。
- アドレスを学習しません。
- BPDU を受信します。

ラーニング ステート

ラーニング ステートのレイヤ 2 インターフェイスは、フレームの転送に關与できるように準備します。インターフェイスはリスニング ステートからラーニング ステートに移行します。

ラーニング ステートのインターフェイスは、次の機能を実行します。

- インターフェイス上で受信したフレームを廃棄します。
- 転送用に他のインターフェイスからスイッチングされたフレームを廃棄します。
- アドレスを学習します。
- BPDU を受信します。

フォワーディング ステート

フォワーディング ステートのレイヤ 2 インターフェイスは、フレームを転送します。インターフェイスはラーニング ステートからフォワーディング ステートに移行します。

フォワーディング ステートのインターフェイスは、次の機能を実行します。

- インターフェイス上でフレームを受信して転送します。
- 他のインターフェイスからスイッチングされたフレームを転送します。
- アドレスを学習します。
- BPDU を受信します。

ディセーブル ステート

ブロッキング ステートのレイヤ 2 インターフェイスは、フレームの転送やスパンニングツリーに關与しません。ディセーブル ステートのインターフェイスは動作不能です。

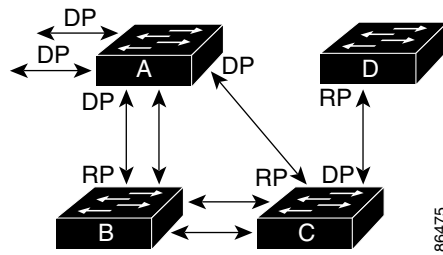
ディセーブル インターフェイスは、次の機能を実行します。

- インターフェイス上で受信したフレームを廃棄します。
- 転送用に他のインターフェイスからスイッチングされたフレームを廃棄します。
- アドレスを学習しません。
- BPDU を受信しません。

スイッチまたはポートがルート スイッチ またはルート ポートになる仕組み

ネットワーク上のすべてのスイッチがデフォルトのスパンニングツリー設定でイネーブルになっている場合、最小の MAC アドレスを持つスイッチがルート スイッチになります。図 15-2 では、スイッチ A がルート スイッチとして選定されます（すべてのスイッチのスイッチ プライオリティがデフォルト (32768) に設定されており、スイッチ A の MAC アドレスが最小であるため）。ただし、トラフィック パターン、転送インターフェイスの数、またはリンク タイプによっては、スイッチ A が最適なルート スイッチとは限りません。ルート スイッチになるように、最適なスイッチのプライオリティを引き上げる（数値を引き下げる）と、スパンニングツリーの再計算が強制的に行われ、最適なスイッチをルートとした新しいトポロジーが形成されます。

図 15-2 スパニングツリー トポロジー



RP = ルート ポート
DP = 指定ポート

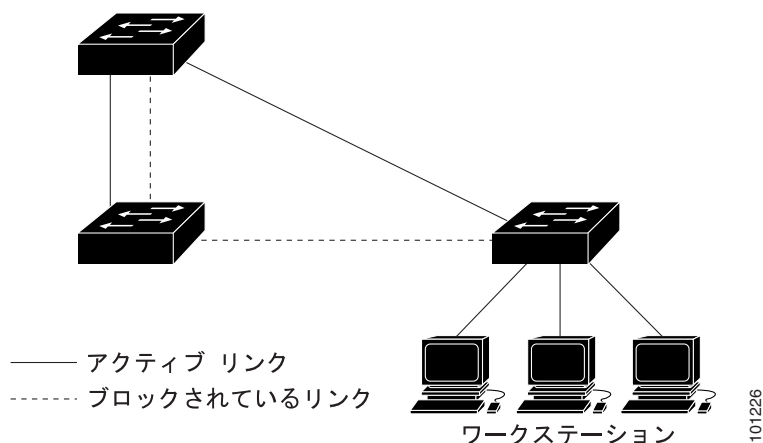
スパニングツリー トポロジーがデフォルトのパラメータに基づいて算出された場合、スイッチドネットワークの送信元エンドステーションから宛先エンドステーションまでのパスが最適にならない場合があります。たとえば、ルートポートよりプライオリティの高いインターフェイスに高速リンクを接続すると、ルートポートが変更される可能性があります。最高速のリンクをルートポートにすることが理想です。

たとえば、スイッチ B のあるポートがギガビットイーサネットリンクで、別のポート (10/100 リンク) がルートポートであると仮定します。ネットワークトラフィックはギガビットイーサネットリンクに流す方が効率的です。ギガビットイーサネットポートのスパニングツリーポートプライオリティをルートポートより高くする (数値を小さくする) と、ギガビットイーサネットポートが新しいルートポートになります。

スパニングツリーおよび冗長接続

2つのスイッチインターフェイスを別の1台の装置、または2台の異なる装置に接続することにより、スパニングツリーを使用して冗長バックボーンを作成できます (図 15-3 を参照)。スパニングツリーは一方のインターフェイスを自動的にディセーブルにし、他方でエラーが発生した場合にはそのディセーブルにしていた方をイネーブルにします。一方のリンクが高速で、他方が低速の場合、必ず、低速の方のリンクがディセーブルになります。速度が同じ場合、ポートプライオリティとポート ID が加算され、値の小さいリンクがスパニングツリーによってディセーブルにされます。

図 15-3 スパニングツリーおよび冗長接続



EtherChannel グループを使用して、スイッチ間に冗長リンクを設定することもできます。詳細については、第 30 章「EtherChannel の設定」を参照してください。

スパンニングツリーのアドレス管理

IEEE 802.1D では、各種ブリッジ プロトコルに使用させるために、0x00180C2000000 ~ 0x00180C2000010 の範囲で 17 のマルチキャスト アドレスが規定されています。これらのアドレスは削除できないスタティック アドレスです。

スパンニングツリーのステートに関係なく、各スイッチは 0x00180C2000000 ~ 0x00180C200000F のアドレス宛でのパケットを受信しますが、転送は行いません。

スパンニングツリーがイネーブルの場合、スイッチの CPU が 0x00180C2000000 および 0x00180C2000010 を宛先とするパケットを受信します。スパンニングツリーがディセーブルの場合、スイッチはこれらのパケットを未知のマルチキャスト アドレスとして転送します。

接続を維持するためのエージング タイムの短縮

ダイナミック アドレスのエージング タイムはデフォルトで 5 分です。これは、**mac address-table aging-time** グローバル コンフィギュレーション コマンドのデフォルト値です。ただし、スパンニングツリーの再構成により、多数のステーションの位置が変更されることがあります。このようなステーションは、再構成中、5 分以上にわたって到達できないことがあるので、アドレス テーブルからステーション アドレスを削除し、改めて学習できるように、アドレス エージング タイムが短縮されます。スパンニングツリー再構成時に短縮されるエージング タイムは、転送遅延パラメータ値 (**spanning-tree vlan vlan-id forward-time seconds** グローバル コンフィギュレーション コマンド) と同じです。

各 VLAN はそれぞれ独立したスパンニングツリー インスタンスなので、スイッチは VLAN 単位でエージング タイムを短縮します。ある VLAN でスパンニングツリーの再構成が行われると、その VLAN で学習されたダイナミック アドレスがエージング タイム短縮の対象になります。他の VLAN のダイナミック アドレスは影響を受けず、スイッチで設定されたエージング タイムがそのまま適用されます。

スパンニングツリー モードおよびプロトコル

このスイッチでサポートされるモードおよびプロトコルは、次のとおりです。

- **PVST+** — このスパンニングツリー モードは、IEEE 802.1D 標準およびシスコ独自の拡張機能に準拠します。すべてのイーサネット ポート ベースの VLAN で使用されるスパンニングツリーのデフォルト モードです。PVST+ はスイッチ上の各 VLAN でサポートされる最大数まで動作し、各 VLAN にネットワーク上でのループフリーパスを提供します。

PVST+ は、対象となる VLAN にレイヤ 2 ロードバランシングを提供します。ネットワーク上の VLAN を使用してさまざまな論理トポロジーを作成し、特定のリンクに偏らないようにすべてのリンクを使用できるようにします。VLAN 上の PVST+ インスタンスごとに、それぞれ 1 つのルート スイッチがあります。このルート スイッチは、その VLAN に対応するスパンニングツリー情報を、ネットワーク上の他のすべてのスイッチに伝送します。このプロセスにより、各スイッチがネットワークに関する共通の情報を持つようになるので、ネットワーク トポロジーが確実に維持されます。

- **Rapid PVST+** — このスパンニングツリー モードは、IEEE 802.1w 標準に準拠した高速コンバージェンスを使用する以外は PVST+ と同じです。高速コンバージェンスを行うため、Rapid PVST+ はトポロジー変更を受信すると、ポート単位でダイナミックに学習した MAC アドレス エントリをただちに削除します。このような場合、PVST+ では、ダイナミックに学習した MAC アドレス エントリには短いエージング タイムが使用されます。

Rapid PVST+ は PVST+ と同じ設定を使用しているため（特に明記する場合を除く）、必要なことは最小限の追加設定のみです。Rapid PVST+ の利点は、大規模な PVST+ のインストールベースを Rapid PVST+ に移行するのに、複雑な MSTP 設定の学習やネットワーク再設定の必要がないことです。Rapid PVST+ モードでは、各 VLAN は独自のスパニングツリー インスタンスを最大数実行します。

- MSTP — このスパニングツリー モードは IEEE 802.1s 標準に準拠しています。複数の VLAN を同一のスパニングツリー インスタンスにマッピングし、多数の VLAN をサポートする場合に必要となるスパニングツリー インスタンスの数を減らすことができます。MSTP は Rapid Spanning-Tree Protocol (RSTP) (IEEE 802.1w 準拠) 上で実行され、転送遅延を解消し、ルートポートおよび指定ポートをフォワーディング ステートにすばやく移行することにより、スパニングツリーの高速コンバージェンスを可能にします。RSTP を使用せずに MSTP を実行することはできません。

MSTP を導入する場合、最も一般的なのは、レイヤ 2 スイッチド ネットワークのバックボーンおよびディストリビューション レイヤへの配備です。詳細については、第 16 章「MSTP の設定」を参照してください。

サポートされるスパニングツリー インスタンス数については、次の項を参照してください。

サポートされるスパニングツリー インスタンス

PVST+ または Rapid PVST+ モードでは、スイッチは最大 128 のスパニングツリー インスタンスをサポートします。

MSTP モードでは、スイッチは最大 65 の MST インスタンスをサポートします。特定の MST インスタンスにマッピングできる VLAN の数に制限はありません。

スパニングツリーと VLAN Trunking Protocol (VTP; VLAN トランキング プロトコル) の相互作用については、「スパニングツリー設定時の注意事項」(p.15-13) を参照してください。

スパニングツリーのインターオペラビリティと下位互換性

表 15-2 に、ネットワークでサポートされるスパニングツリー モード間のインターオペラビリティと下位互換性を示します。

表 15-2 PVST+、MSTP、および Rapid PVST+ のインターオペラビリティ

	PVST+	MSTP	Rapid PVST+
PVST+	あり	あり (制限あり)	あり (PVST+ に戻る)
MSTP	あり (制限あり)	あり	あり (PVST+ に戻る)
Rapid PVST+	あり (PVST+ に戻る)	あり (PVST+ に戻る)	あり

MSTP および PVST+ が混在したネットワークでは、Common Spanning-Tree (CST) のルートは MST バックボーンの内側に配置する必要があり、PVST+ スイッチを複数の MST リージョンに接続することはできません。

ネットワーク内に Rapid PVST+ が稼働しているスイッチと PVST+ が稼働しているスイッチが存在する場合、Rapid PVST+ スイッチと PVST+ スイッチを別のスパニングツリー インスタンスにすることを推奨します。Rapid PVST+ スパニングツリー インスタンスでは、ルートスイッチは Rapid PVST+ スイッチでなければなりません。PVST+ インスタンスでは、ルートスイッチは PVST+ スイッチでなければなりません。PVST+ スイッチはネットワークのエッジに配置する必要があります。

STP および IEEE 802.1Q トランク

VLAN トランクに関する IEEE 802.1Q 規格は、ネットワークのスパニングツリー戦略に一定の制限を設けています。この規格では、トランク上で使用できるすべての VLAN に対して、1 つのスパニングツリーインスタンスしか認められません。ただし、IEEE 802.1Q トランクによって接続されたシスコ製スイッチのネットワークでは、スイッチはトランク上で使用できる各 VLAN に 1 つずつ、スパニングツリーインスタンスを維持します。

IEEE 802.1Q トランクを使用してシスコ製スイッチを他社製の装置に接続する場合、シスコ製スイッチは PVST+ を使用してスパニングツリーのインターオペラビリティを実現します。Rapid PVST+ がイネーブルの場合、スイッチは PVST+ ではなく Rapid PVST+ を使用します。スイッチは、トランクの IEEE 802.1Q VLAN のスパニングツリーインスタンスと他社の IEEE 802.1Q スwitch のスパニングツリーインスタンスを結合します。

ただし、PVST+ または Rapid PVST+ の情報はすべて、他社製の IEEE 802.1Q スwitch からなるクラウドにより分離されたシスコ製スイッチによって維持されます。シスコ製スイッチを分離する他社製の IEEE 802.1Q クラウドは、スイッチ間の単一トランク リンクとして扱われます。

PVST+ は IEEE 802.1Q トランクで自動的にイネーブルになるので、ユーザ側で設定する必要はありません。アクセス ポートおよび ISL (スイッチ間リンク) トランク ポートでの外部スパニングツリーの動作は、PVST+ の影響を受けません。

IEEE 802.1Q トランクの詳細については、[第 12 章「VLAN の設定」](#) を参照してください。

スパニングツリー機能の設定

ここでは、次の設定情報について説明します。

- スパニングツリー機能のデフォルト設定 (p.15-12)
- スパニングツリー設定時の注意事項 (p.15-13)
- スパニングツリーモードの変更 (p.15-14) (必須)
- スパニングツリーのディセーブル化 (p.15-15) (任意)
- ルートスイッチの設定 (p.15-15) (任意)
- セカンダリルートスイッチの設定 (p.15-17) (任意)
- ポートプライオリティの設定 (p.15-18) (任意)
- パスコストの設定 (p.15-19) (任意)
- VLAN のスイッチプライオリティの設定 (p.15-20) (任意)
- スパニングツリータイマーの設定 (p.15-21) (任意)

スパニングツリー機能のデフォルト設定

表 15-3 に、スパニングツリー機能のデフォルト設定を示します。

表 15-3 スパニングツリー機能のデフォルト設定

機能	デフォルト設定
イネーブル ステート	VLAN 1 上でイネーブル 詳細については、「サポートされるスパニングツリーインスタンス」(p.15-10) を参照してください。
スパニングツリー モード	PVST+ (Rapid PVST+ と MSTP はディセーブル)
スイッチ プライオリティ	32768
スパニングツリー ポート プライオリティ (インターフェイス単位で設定可能)	128
スパニングツリー ポート コスト (インターフェイス単位で設定可能)	1000 Mbps : 4 100 Mbps : 19 10 Mbps : 100
スパニングツリー VLAN ポート プライオリティ (VLAN 単位で設定可能)	128
スパニングツリー VLAN ポート コスト (VLAN 単位で設定可能)	1000 Mbps : 4 100 Mbps : 19 10 Mbps : 100
スパニングツリー タイマー	Hello タイム : 2 秒 転送遅延時間 : 15 秒 最大エージング タイム : 20 秒 転送保留カウント : 6 BPDU

スパンニングツリー設定時の注意事項

スパンニングツリー インスタンスより多くの VLAN が VTP で定義されている場合、スイッチ上で PVST+ または Rapid PVST+ をイネーブルにできる VLAN は 128 に限定されます。残りの VLAN は、スパンニングツリーがディセーブルの状態で作動します。ただし、MSTP を使用して複数の VLAN を同一のスパンニングツリー インスタンスにマッピングすることが可能です。詳細については、第 16 章「MSTP の設定」を参照してください。

128 のスパンニングツリー インスタンスがすでに使用されている場合、VLAN の 1 つでスパンニングツリーをディセーブルにして、STP を稼働させたい別の VLAN でイネーブルにできます。no spanning-tree vlan *vlan-id* グローバル コンフィギュレーション コマンドを使用して、特定の VLAN でスパンニングツリーをディセーブルにし、spanning-tree vlan *vlan-id* グローバル コンフィギュレーション コマンドを使用して、所定の VLAN でスパンニングツリーをイネーブルにします。



注意

スパンニングツリーが稼働していないスイッチは、スパンニングツリー インスタンスが稼働している VLAN 上の他のスイッチがループを切断できるように、受信した BPDU を引き続き転送します。したがって、スパンニング ツリーは、ネットワーク上のすべてのループを切断できるように十分な数のスイッチ上で稼働している必要があります。たとえば、VLAN の各ループで少なくとも 1 台のスイッチがスパンニング ツリーを稼働している必要があります。VLAN 内のすべてのスイッチでスパンニングツリーを稼働させる必要はありません。ただし、最小限の数のスイッチだけでスパンニングツリーが稼働している状況では、不注意なネットワーク変更によって VLAN に別のループが発生し、ブロードキャスト ストームを引き起こす可能性があります。



(注)

スイッチ上の使用可能なスパンニングツリー インスタンスをすべて使い切ってしまったあとに、VTP ドメイン内にさらに別の VLAN を追加すると、そのスイッチ上にスパンニングツリーが稼働しない VLAN が生成されます。そのスイッチのトランク ポート上でデフォルトの許可リストが設定されていると、すべてのトランク ポート上に新しい VLAN が割り当てられます。ネットワーク トポロジーによっては、新しい VLAN 上で、切断されないループが生成されることがあります。特に、複数の隣接スイッチでスパンニングツリー インスタンスをすべて使用してしまっている場合には注意が必要です。スパンニングツリー インスタンスの割り当てを使い果たしたスイッチのトランク ポートに許可リストを設定することにより、このような可能性を防ぐことができます。ただし、ネットワークへの VLAN の追加に多くの作業を伴うことになるので、通常、許可リストの設定は必要ありません。

VLAN スパンニングツリー インスタンスの設定はスパンニングツリー コマンドによって制御されます。スパンニングツリー インスタンスは、VLAN にインターフェイスを割り当てるときに作成します。スパンニングツリー インスタンスは最終インターフェイスが別の VLAN に移されたときに削除されます。スパンニングツリー インスタンスの作成前に、スイッチとポートのパラメータを設定できます。設定されたパラメータは、スパンニングツリー インスタンスを作成するときに適用されます。

スイッチは、PVST+、Rapid PVST+、および MSTP をサポートしますが、アクティブにできるバージョンは常に 1 つだけです（たとえば、すべての VLAN で PVST+ を使用するか、すべての VLAN で Rapid PVST+ を使用するか、またはすべての VLAN で MSTP を使用することになります）。さまざまなスパンニングツリー モードおよびインターオペラビリティについては、「スパンニングツリーのインターオペラビリティと下位互換性」(p.15-10) を参照してください。

UplinkFast および BackboneFast の設定時の注意事項については、「オプションのスパンニングツリー設定時の注意事項」(p.17-10) を参照してください。

スパニングツリー モードの変更

スイッチは、PVST+、Rapid PVST+、および MSTP の 3 つのスパニングツリー モードをサポートします。デフォルトで、スイッチは PVST+ プロトコルを使用します。

スパニングツリー モードを変更するには、イネーブル EXEC モードで次の手順を実行します。デフォルト モード以外のモードをイネーブルにする場合、この手順は必須です。

	コマンド	目的
ステップ 1	<code>configure terminal</code>	グローバル コンフィギュレーション モードを開始します。
ステップ 2	<code>spanning-tree mode {pvst mst rapid-pvst}</code>	<p>スパニングツリー モードを設定します。</p> <ul style="list-style-type: none"> pvst を指定して、PVST+ をイネーブルにします (デフォルト設定)。 mst を指定して、MSTP (および RSTP) をイネーブルにします。設定手順の詳細については、第 16 章「MSTP の設定」を参照してください。 rapid-pvst を指定して、Rapid PVST+ をイネーブルにします。
ステップ 3	<code>interface interface-id</code>	(Rapid PVST+ モードの場合のみ推奨) 設定するインターフェイスを指定し、インターフェイス コンフィギュレーション モードを開始します。有効なインターフェイスには、物理ポート、VLAN、およびポートチャネルがあります。VLAN ID の範囲は 1 ~ 4094 です。ポートチャネルの範囲は 1 ~ 6 です。
ステップ 4	<code>spanning-tree link-type point-to-point</code>	<p>(Rapid PVST+ モードの場合のみ推奨) このポートのリンク タイプをポイントツーポイントに指定します。</p> <p>このポート (ローカル ポート) をポイントツーポイント リンクでリモート ポートと接続し、ローカル ポートが指定ポートになると、スイッチはリモート ポートとネゴシエートし、ローカル ポートをフォワーディング ステートに高速変更します。</p>
ステップ 5	<code>end</code>	イネーブル EXEC モードに戻ります。
ステップ 6	<code>clear spanning-tree detected-protocols</code>	<p>(Rapid PVST+ モードの場合のみ推奨) スイッチ上の任意のポートが IEEE 802.1D 準拠のレガシー スイッチのポートと接続されている場合に、スイッチ全体でプロトコル移行プロセスを再開します。</p> <p>このステップは、このスイッチで Rapid PVST+ が稼働していることを指定スイッチが検出する場合のオプションです。</p>
ステップ 7	<code>show spanning-tree summary</code> および <code>show spanning-tree interface interface-id</code>	設定を確認します。
ステップ 8	<code>copy running-config startup-config</code>	(任意) コンフィギュレーション ファイルにエントリを保存します。

デフォルトの設定値に戻す場合は、**no spanning-tree mode** グローバル コンフィギュレーション コマンドを使用します。ポートをデフォルト設定に戻すには、**no spanning-tree link-type** インターフェイス コンフィギュレーション コマンドを使用します。

スパンニングツリーのディセーブル化

スパンニングツリーはデフォルトで、VLAN 1 および「サポートされるスパンニングツリー インスタンス」(p.15-10) のスパンニングツリー限度を上限として新しく作成されたすべての VLAN 上でイネーブルです。スパンニングツリーをディセーブルにするのは、ネットワーク トポロジーにループがないことが確実な場合だけにしてください。



注意

スパンニングツリーがディセーブルでありながら、トポロジーにループが存在していると、余分なトラフィックが発生し、パケットの重複が無限に繰り返されることによって、ネットワークのパフォーマンスが大幅に低下します。

VLAN 単位でスパンニングツリーをディセーブルにするには、イネーブル EXEC モードで次の手順を実行します。この手順は任意です。

	コマンド	目的
ステップ 1	<code>configure terminal</code>	グローバル コンフィギュレーション モードを開始します。
ステップ 2	<code>no spanning-tree vlan vlan-id</code>	<code>vlan-id</code> に指定できる範囲は、1 ~ 4094 です。
ステップ 3	<code>end</code>	イネーブル EXEC モードに戻ります。
ステップ 4	<code>show spanning-tree vlan vlan-id</code>	設定を確認します。
ステップ 5	<code>copy running-config startup-config</code>	(任意) コンフィギュレーション ファイルにエントリを保存します。

スパンニングツリーを再びイネーブルにする場合は、`spanning-tree vlan vlan-id` グローバル コンフィギュレーション コマンドを使用します。

ルート スイッチの設定

スイッチは、スイッチ上で設定されているアクティブ VLAN ごとに 1 つずつ、個別のスパンニングツリー インスタンスを維持します。各インスタンスには、スイッチプライオリティとスイッチの MAC アドレスからなるブリッジ ID が対応付けられます。VLAN ごとに、ブリッジ ID が最小のスイッチがその VLAN のルート スイッチになります。

特定の VLAN でスイッチがルートになるように設定するには、`spanning-tree vlan vlan-id root` グローバル コンフィギュレーション コマンドを使用して、スイッチプライオリティをデフォルト値 (32768) からかなり小さい値に変更します。このコマンドを入力すると、ソフトウェアが各 VLAN について、ルート スイッチのスイッチプライオリティをチェックします。拡張システム ID をサポートするため、スイッチは指定された VLAN の自身のプライオリティを 24576 に設定します。この値によって、このスイッチを指定された VLAN のルートに設定できます。

指定された VLAN のルート スイッチに 24576 未満のスイッチプライオリティが設定されている場合、スイッチはその VLAN について、自身のプライオリティを最小のスイッチプライオリティより 4096 だけ小さい値に設定します (表 15-1 [p.15-4] に示すように、4096 は 4 ビットのスイッチプライオリティ値の最下位ビットの値です)。



(注)

ルート スイッチとして設定する必要のある値が 1 未満の場合、`spanning-tree vlan vlan-id root` グローバル コンフィギュレーション コマンドは失敗します。



(注) ネットワーク上に拡張システム ID をサポートするスイッチとサポートしないスイッチが混在する場合は、拡張システム ID をサポートするスイッチがルート スイッチになることはほぼありません。拡張システム ID によって、旧ソフトウェアが稼働する接続スイッチのプライオリティより VLAN 番号が大きくなるたびに、スイッチプライオリティ値が増大します。



(注) 各スパニングツリーインスタンスのルート スイッチは、バックボーン スイッチまたはディストリビューション スイッチにする必要があります。アクセス スイッチをスパニングツリーのプライマリ ルートとして設定しないでください。

diameter キーワードを使用して、レイヤ 2 ネットワークの直径（すなわち、レイヤ 2 ネットワーク上の任意の 2 つのエンド ステーション間の最大スイッチ ホップ数）を指定します。ネットワークの直径を指定すると、その直径のネットワークに最適な Hello タイム、転送遅延時間、および最大エージング タイムをスイッチが自動的に設定するので、コンバージェンスの所要時間を大幅に短縮できます。自動的に算出された Hello タイムを変更する場合は、**hello** キーワードを使用します。



(注) ルート スイッチとして設定したあとで、**spanning-tree vlan vlan-id hello-time**、**spanning-tree vlan vlan-id forward-time**、および **spanning-tree vlan vlan-id max-age** グローバル コンフィギュレーション コマンドを使用して、Hello タイム、転送遅延時間、および最大エージング タイムを手動で設定することは推奨できません。

スイッチが特定の VLAN のルートになるように設定するには、イネーブル EXEC モードで次の手順を実行します。この手順は任意です。

	コマンド	目的
ステップ 1	configure terminal	グローバル コンフィギュレーション モードを開始します。
ステップ 2	spanning-tree vlan vlan-id root primary [diameter net-diameter [hello-time seconds]]	指定された VLAN のルートになるように、スイッチを設定します。 <ul style="list-style-type: none"> vlan-id には、VLAN ID で識別された単一の VLAN、ハイフンで区切られた範囲の VLAN、またはカンマで区切られた一連の VLAN を指定できます。指定できる範囲は 1 ~ 4094 です。 (任意) diameter net-diameter には、任意の 2 つのエンド ステーション間の最大スイッチ数を指定します。指定できる範囲は 2 ~ 7 です。 (任意) hello-time seconds には、ルート スイッチによってコンフィギュレーション メッセージが生成される間隔を秒数で指定します。指定できる範囲は 1 ~ 10 です。デフォルトは 2 です。
ステップ 3	end	イネーブル EXEC モードに戻ります。
ステップ 4	show spanning-tree detail	設定を確認します。
ステップ 5	copy running-config startup-config	(任意) コンフィギュレーション ファイルにエントリを保存します。

デフォルトの設定値に戻す場合は、**no spanning-tree vlan *vlan-id* root** グローバル コンフィギュレーション コマンドを使用します。

セカンダリ ルート スイッチの設定

スイッチをセカンダリ ルートとして設定すると、スイッチ プライオリティがデフォルト値 (32768) から 28672 に変更されます。したがって、プライマリ ルート スイッチで障害が発生した場合に、このスイッチが指定された VLAN のルート スイッチになる可能性が高くなります。これは、他のネットワーク スイッチがデフォルトのスイッチ プライオリティ 32768 を使用し、ルート スイッチになる可能性が低いことが前提です。

複数のスイッチでこのコマンドを実行すると、複数のバックアップ ルート スイッチを設定できます。**spanning-tree vlan *vlan-id* root primary** グローバル コンフィギュレーション コマンドでプライマリ ルート スイッチを設定したときと同じネットワーク直径および Hello タイム値を使用してください。

スイッチが特定の VLAN のセカンダリ ルートになるように設定するには、イネーブル EXEC モードで次の手順を実行します。この手順は任意です。

	コマンド	目的
ステップ 1	configure terminal	グローバル コンフィギュレーション モードを開始します。
ステップ 2	spanning-tree vlan <i>vlan-id</i> root secondary [<i>diameter net-diameter</i> [<i>hello-time seconds</i>]]	指定された VLAN のセカンダリ ルートになるように、スイッチを設定します。 <ul style="list-style-type: none"> <i>vlan-id</i> には、VLAN ID で識別された単一の VLAN、ハイフンで区切られた範囲の VLAN、またはカンマで区切られた一連の VLAN を指定できます。指定できる範囲は 1 ~ 4094 です。 (任意) <i>diameter net-diameter</i> には、任意の 2 つのエンドステーション間の最大スイッチ数を指定します。指定できる範囲は 2 ~ 7 です。 (任意) <i>hello-time seconds</i> には、ルート スイッチによってコンフィギュレーション メッセージが生成される間隔を秒数で指定します。指定できる範囲は 1 ~ 10 です。デフォルトは 2 です。 プライマリ ルート スイッチを設定したときと同じネットワーク直径および Hello タイム値を使用してください。「 ルート スイッチの設定 」(p.15-15) を参照してください。
ステップ 3	end	イネーブル EXEC モードに戻ります。
ステップ 4	show spanning-tree detail	設定を確認します。
ステップ 5	copy running-config startup-config	(任意) コンフィギュレーション ファイルにエントリを保存します。

デフォルトの設定値に戻す場合は、**no spanning-tree vlan *vlan-id* root** グローバル コンフィギュレーション コマンドを使用します。

ポート プライオリティの設定

ループが発生した場合、スパニングツリーはポート プライオリティを使用して、フォワーディングステートにするインターフェイスを選択します。最初に選択させたいインターフェイスには高いプライオリティ（小さい数値）を与え、最後に選択させたいインターフェイスには低いプライオリティ（大きい数値）を与えます。すべてのインターフェイスに同じプライオリティ値が与えられている場合、スパニングツリーはインターフェイス番号が最小のインターフェイスをフォワーディングステートにし、他のインターフェイスをブロックします。

インターフェイスのポート プライオリティを設定するには、イネーブル EXEC モードで次の手順を実行します。この手順は任意です。

	コマンド	目的
ステップ 1	<code>configure terminal</code>	グローバル コンフィギュレーション モードを開始します。
ステップ 2	<code>interface interface-id</code>	設定するインターフェイスを指定し、インターフェイス コンフィギュレーション モードを開始します。 有効なインターフェイスは、物理ポートおよびポート チャネル論理インターフェイス (<code>port-channel port-channel-number</code>) です。
ステップ 3	<code>spanning-tree port-priority priority</code>	インターフェイスにポート プライオリティを設定します。 <i>priority</i> に指定できる範囲は 0 ~ 240 で、16 ずつ増加します。デフォルトは 128 です。有効な値は、0、16、32、48、64、80、96、112、128、144、160、176、192、208、224、240 です。その他の値はすべて拒否されます。値が小さいほど、プライオリティは高くなります。
ステップ 4	<code>spanning-tree vlan vlan-id port-priority priority</code>	VLAN にポート プライオリティを設定します。 <ul style="list-style-type: none"> <i>vlan-id</i> には、VLAN ID で識別された単一の VLAN、ハイフンで区切られた範囲の VLAN、またはカンマで区切られた一連の VLAN を指定できます。指定できる範囲は 1 ~ 4094 です。 <i>priority</i> に指定できる範囲は 0 ~ 240 で、16 ずつ増加します。デフォルトは 128 です。有効な値は、0、16、32、48、64、80、96、112、128、144、160、176、192、208、224、240 です。その他の値はすべて拒否されます。値が小さいほど、プライオリティは高くなります。
ステップ 5	<code>end</code>	イネーブル EXEC モードに戻ります。
ステップ 6	<code>show spanning-tree interface interface-id</code> または <code>show spanning-tree vlan vlan-id</code>	設定を確認します。
ステップ 7	<code>copy running-config startup-config</code>	(任意) コンフィギュレーション ファイルにエントリを保存します。



(注) `show spanning-tree interface interface-id` イネーブル EXEC コマンドによって表示されるのは、リンク アップ動作可能状態のポートの情報だけです。それ以外の情報については、`show running-config interface` イネーブル EXEC コマンドを使用して設定を確認してください。

デフォルトの設定値に戻す場合は、**no spanning-tree [vlan vlan-id] port-priority** インターフェイス コンフィギュレーション コマンドを使用します。スパンニングツリー ポート プライオリティを使用してトランク ポートに負荷分散を設定する手順については、「[トランク ポートの負荷分散の設定](#)」(p.12-25) を参照してください。

パス コストの設定

スパンニングツリー パス コストのデフォルト値は、インターフェイスのメディア速度に基づきます。ループが発生した場合、スパンニングツリーはコストを使用して、フォワーディング ステートにするインターフェイスを選択します。最初に選択させたいインターフェイスには小さいコスト値を与え、最後に選択させたいインターフェイスには大きいコスト値を与えます。すべてのインターフェイスに同じコスト値が与えられている場合、スパンニングツリーはインターフェイス番号が最小のインターフェイスをフォワーディング ステートにし、他のインターフェイスをブロックします。

インターフェイスのコストを設定するには、イネーブル EXEC モードで次の手順を実行します。この手順は任意です。

	コマンド	目的
ステップ 1	configure terminal	グローバル コンフィギュレーション モードを開始します。
ステップ 2	interface interface-id	設定するインターフェイスを指定し、インターフェイス コンフィギュレーション モードを開始します。有効なインターフェイスは、物理ポートおよびポート チャネル論理インターフェイス (port-channel port-channel-number) です。
ステップ 3	spanning-tree cost cost	インターフェイスにコストを設定します。 ループが発生した場合、スパンニングツリーはパス コストを使用して、フォワーディング ステートにするインターフェイスを選択します。パス コストが小さいほど、高速で伝送されます。 <i>cost</i> に指定できる範囲は 1 ~ 200000000 です。デフォルト値はインターフェイスのメディア速度に基づきます。
ステップ 4	spanning-tree vlan vlan-id cost cost	VLAN にコストを設定します。 ループが発生した場合、スパンニングツリーはパス コストを使用して、フォワーディング ステートにするインターフェイスを選択します。パス コストが小さいほど、高速で伝送されます。 <ul style="list-style-type: none"> <i>vlan-id</i> には、VLAN ID で識別された単一の VLAN、ハイフンで区切られた範囲の VLAN、またはカンマで区切られた一連の VLAN を指定できます。指定できる範囲は 1 ~ 4094 です。 <i>cost</i> に指定できる範囲は 1 ~ 200000000 です。デフォルト値はインターフェイスのメディア速度に基づきます。
ステップ 5	end	イネーブル EXEC モードに戻ります。
ステップ 6	show spanning-tree interface interface-id または show spanning-tree vlan vlan-id	設定を確認します。
ステップ 7	copy running-config startup-config	(任意) コンフィギュレーション ファイルにエントリを保存します。



(注) `show spanning-tree interface interface-id` イネーブル EXEC コマンドによって表示されるのは、リンク アップ動作可能状態のポートの情報だけです。それ以外の情報については、`show running-config` イネーブル EXEC コマンドを使用して設定を確認してください。

デフォルトの設定値に戻す場合は、`no spanning-tree [vlan vlan-id] cost` インターフェイス コンフィギュレーション コマンドを使用します。スパニングツリーパスコストを使用してトランクポートに負荷分散を設定する手順については、「トランクポートの負荷分散の設定」(p.12-25) を参照してください。

VLAN のスイッチ プライオリティの設定

スイッチ プライオリティを設定することによって、スイッチがルートスイッチとして選択される可能性を高めることができます。



(注) このコマンドは、十分に注意して使用してください。スイッチ プライオリティの変更には、通常は、`spanning-tree vlan vlan-id root primary` および `spanning-tree vlan vlan-id root secondary` グローバル コンフィギュレーション コマンドを使用することを推奨します。

VLAN のスイッチ プライオリティを設定するには、イネーブル EXEC モードで次の手順を実行します。この手順は任意です。

	コマンド	目的
ステップ 1	<code>configure terminal</code>	グローバル コンフィギュレーション モードを開始します。
ステップ 2	<code>spanning-tree vlan vlan-id priority priority</code>	VLAN のスイッチ プライオリティを設定します。 <ul style="list-style-type: none"> <code>vlan-id</code> には、VLAN ID で識別された単一の VLAN、ハイフンで区切られた範囲の VLAN、またはカンマで区切られた一連の VLAN を指定できます。指定できる範囲は 1 ~ 4094 です。 <code>priority</code> を指定する場合、指定できる範囲は 0 ~ 61440 で、4096 ずつ増加します。デフォルトは 32768 です。数値が小さいほど、スイッチがルートスイッチとして選択される可能性が高くなります。 有効なプライオリティ値は、4096、8192、12288、16384、20480、24576、28672、32768、36864、40960、45056、49152、53248、57344、61440 です。それ以外の値はすべて拒否されます。
ステップ 3	<code>end</code>	イネーブル EXEC モードに戻ります。
ステップ 4	<code>show spanning-tree vlan vlan-id</code>	設定を確認します。
ステップ 5	<code>copy running-config startup-config</code>	(任意) コンフィギュレーション ファイルにエントリを保存します。

デフォルトの設定値に戻す場合は、`no spanning-tree vlan vlan-id priority` グローバル コンフィギュレーション コマンドを使用します。

スパンニングツリー タイマーの設定

表 15-4 で、スパンニングツリーのパフォーマンス全体を左右するタイマーについて説明します。

表 15-4 スパンニングツリー タイマー

変数	説明
Hello タイマー	スイッチから他のスイッチへ Hello メッセージをブロードキャストする頻度を制御します。
転送遅延タイマー	インターフェイスが転送を開始するまでに、リスニング ステートおよびラーニング ステートが継続する時間を制御します。
最大エージング タイマー	インターフェイスが受信したプロトコル情報をスイッチで保持する期間を制御します。
転送保留カウント	1 秒間一時停止する前に送信可能な BPDU の数を制御します。

以下に設定手順を示します。

Hello タイムの設定

Hello タイムを変更することによって、ルート スイッチによってコンフィギュレーション メッセージが生成される間隔を設定できます。



(注) このコマンドは、十分に注意して使用してください。Hello タイムの変更には、通常、**spanning-tree vlan *vlan-id* root primary** および **spanning-tree vlan *vlan-id* root secondary** グローバル コンフィギュレーション コマンドを使用することを推奨します。

VLAN の Hello タイムを設定するには、イネーブル EXEC モードで次の手順を実行します。この手順は任意です。

	コマンド	目的
ステップ 1	configure terminal	グローバル コンフィギュレーション モードを開始します。
ステップ 2	spanning-tree vlan <i>vlan-id</i> hello-time <i>seconds</i>	VLAN の Hello タイムを設定します。Hello タイムはルート スイッチがコンフィギュレーション メッセージを生成する間隔です。これらのメッセージは、スイッチがアクティブであることを意味します。 <ul style="list-style-type: none"> <i>vlan-id</i> には、VLAN ID で識別された単一の VLAN、ハイフンで区切られた範囲の VLAN、またはカンマで区切られた一連の VLAN を指定できます。指定できる範囲は 1 ~ 4094 です。 <i>seconds</i> に指定できる範囲は 1 ~ 10 です。デフォルト値は 2 です。
ステップ 3	end	イネーブル EXEC モードに戻ります。
ステップ 4	show spanning-tree vlan <i>vlan-id</i>	設定を確認します。
ステップ 5	copy running-config startup-config	(任意) コンフィギュレーション ファイルにエントリを保存します。

デフォルトの設定値に戻す場合は、**no spanning-tree vlan *vlan-id* hello-time** グローバル コンフィギュレーション コマンドを使用します。

■ スパニングツリー機能の設定

VLAN の転送遅延時間の設定

VLAN の転送遅延時間を設定するには、イネーブル EXEC モードで次の手順を実行します。この手順は任意です。

	コマンド	目的
ステップ 1	<code>configure terminal</code>	グローバル コンフィギュレーション モードを開始します。
ステップ 2	<code>spanning-tree vlan <i>vlan-id</i> forward-time <i>seconds</i></code>	VLAN の転送時間を設定します。転送遅延時間は、スパニングツリー ラーニング ステートおよびリスニング ステートからフォワーディング ステートに移行するまでに、インターフェイスが待機する秒数です。 <ul style="list-style-type: none"> <i>vlan-id</i> には、VLAN ID で識別された単一の VLAN、ハイフンで区切られた範囲の VLAN、またはカンマで区切られた一連の VLAN を指定できます。指定できる範囲は 1 ~ 4094 です。 <i>seconds</i> に指定できる範囲は 4 ~ 30 です。デフォルト値は 15 です。
ステップ 3	<code>end</code>	イネーブル EXEC モードに戻ります。
ステップ 4	<code>show spanning-tree vlan <i>vlan-id</i></code>	設定を確認します。
ステップ 5	<code>copy running-config startup-config</code>	(任意) コンフィギュレーション ファイルにエントリを保存します。

デフォルトの設定値に戻す場合は、`no spanning-tree vlan vlan-id forward-time` グローバル コンフィギュレーション コマンドを使用します。

VLAN の最大エージング タイムの設定

VLAN の最大エージング タイムを設定するには、イネーブル EXEC モードで次の手順を実行します。この手順は任意です。

	コマンド	目的
ステップ 1	<code>configure terminal</code>	グローバル コンフィギュレーション モードを開始します。
ステップ 2	<code>spanning-tree vlan <i>vlan-id</i> max-age <i>seconds</i></code>	VLAN の最大エージング タイムを設定します。最大エージング タイムは、再構成を試行するまでにスイッチがスパニングツリー コンフィギュレーション メッセージを受信せずに待機する秒数です。 <ul style="list-style-type: none"> <i>vlan-id</i> には、VLAN ID で識別された単一の VLAN、ハイフンで区切られた範囲の VLAN、またはカンマで区切られた一連の VLAN を指定できます。指定できる範囲は 1 ~ 4094 です。 <i>seconds</i> に指定できる範囲は 6 ~ 40 です。デフォルト値は 20 です。
ステップ 3	<code>end</code>	イネーブル EXEC モードに戻ります。
ステップ 4	<code>show spanning-tree vlan <i>vlan-id</i></code>	設定を確認します。
ステップ 5	<code>copy running-config startup-config</code>	(任意) コンフィギュレーション ファイルにエントリを保存します。

デフォルトの設定値に戻す場合は、`no spanning-tree vlan vlan-id max-age` グローバル コンフィギュレーション コマンドを使用します。

転送保留カウンタの設定

転送保留カウンタの値を変化させることにより、BPDU バースト サイズを設定できます。



(注)

特に Rapid PVST モードの場合、このパラメータ値を大きくすると、CPU 使用率に重大な影響を及ぼします。この値を小さくすると、状況によってはコンバージェンスが低速化します。デフォルト設定のままにすることを推奨します。

転送保留カウンタを設定するには、イネーブル EXEC モードで次の手順を実行します。この手順は任意です。

	コマンド	目的
ステップ 1	<code>configure terminal</code>	グローバル コンフィギュレーション モードを開始します。
ステップ 2	<code>spanning-tree transmit hold-count value</code>	1 秒間一時停止する前に送信可能な BPDU の数を設定します。 <i>value</i> に指定できる範囲は 1 ~ 20 です。デフォルト値は 6 です。
ステップ 3	<code>end</code>	イネーブル EXEC モードに戻ります。
ステップ 4	<code>show spanning-tree detail</code>	設定を確認します。
ステップ 5	<code>copy running-config startup-config</code>	(任意) コンフィギュレーション ファイルにエントリを保存します。

デフォルトの設定値に戻す場合は、`no spanning-tree transmit hold-count value` グローバル コンフィギュレーション コマンドを使用します。

スパニングツリー ステータスの表示

スパニングツリー ステータスを表示するには、表 15-5 のイネーブル EXEC コマンドを 1 つまたは複数使用します。

表 15-5 スパニングツリー ステータス表示用のコマンド

コマンド	目的
<code>show spanning-tree active</code>	アクティブ インターフェイスに関するスパニングツリー情報だけを表示します。
<code>show spanning-tree detail</code>	インターフェイス情報の詳細サマリーを表示します。
<code>show spanning-tree interface <i>interface-id</i></code>	特定のインターフェイスのスパニングツリー情報を表示します。
<code>show spanning-tree summary [totals]</code>	インターフェイス ステートのサマリーを表示します。または STP ステート セクションのすべての行を表示します。

`clear spanning-tree [interface interface-id]` イネーブル EXEC コマンドを使用して、スパニングツリーカウンタをクリアできます。

`show spanning-tree` イネーブル EXEC コマンドの他のキーワードについては、このリリースに対応するコマンド リファレンスを参照してください。